
テイルズオブシンフォニア・自分の笑顔を誰かのために

プリンメロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブシンフォニア・自分の笑顔を誰かのために

【NNコード】

N3548D

【作者名】 プリンメロン

【あらすじ】

これは全クリ後のお話。コレット主体で進む物語・・・

第一話

彼は旅立つて行つた

多分、もつ会うことも無いだろう

いや・・・私が彼を避けてしまうかも知れない

彼は私ではなく、彼女を選んだのだ

分かれる間際までは笑顔でいれた

姿が見えなくなるまで、

「幸せに」とも思つた

でも・・・彼が居なくなつてから気づいた

ああ・・・私はこんなにも彼の事が好きだったのだと

【テイルズオブシンフォニア・自分の笑顔を誰かのために・前編】

『イセリア』

小鳥の囀りがきこえるとともに、朝が来たことに気がつくベットに横になっている身体を起し、水色の毛布をじけ、部屋のカーテンを開けに立ち上がった

カーテンを開けると、まだ登りきっていない太陽が、山の向こうから顔を出していた

また始まってしまった・・・コウツな一日が・・・

ピンクのパジャマから、青いワンピースを着て、下に下りていった

少し前までは、毎日白い神子装束を着ていたのだが、今はもうそんな必要も無い

それに、昔の服を見るといつも思い出してしまつ・・・

一階には、お婆様が朝ごはんをテーブルに並べていた

今日はトーストに玉焼き、カリカリのベーコン

椅子に座り、トーストをかじりながら考えた

最近、同じ毎日が繰り返されている気がする

朝起きて、『ご飯を食べて、村を歩き回つて、疲れたら家に帰り眠りにつく』

代わりばえのない日々。やることも無い毎日。時間が流れるのを待つている自分

ここまで自分の中から

「やる気」というものが無くなるなんて思わなかつた

いや、やる気が起つることなんて無いのだから仕方が無い

仲間は皆、それぞれの道を歩み始めた

その中でただ一人、時間があのときのままの自分がいる

やる事を探しても、せいぜい家事くらいだらうか

でも仕方がないんだ。そもそも私は世界再生の為に生まれてきたの
だから

私の使命は終わったのだ。

もう、私の価値なんて・・・・・・

無い

食べ終わると、食器をながしに置き、家を出ようとした。

その時、後ろから声をかけられた

「コレグト。頼みがあるじゃけど、いいかの?」

老人のか嗄れた声。お婆様だ

「…………うん」

「やうか。」れをダイクさんの所に置いてはくれないか？」

そうこうで、大きな巾着袋をロケットで渡した

軽く頷き、家を出た

正直、ダイクさんの家にはあまり行きたくないなった。せつかれよとしていることを、また思い出してしまうからだ

でも、やめじとも無くして、お話をなつてこらるお婆様の頬みだから。行く

重い足を歩き、ようつて、元気へつと歩を出した

《ダイクの家》

木造で作られた家の玄関に立ち、軽くノックをした

「だれでえーー。」

家のなかの声がきこえた。びっくりするよつだ

「わ、私です。」と答えた

「おおー、嬢ちゃんか。入りな」

そつとドアを開けると、小柄の人気が現れた。……ダイクさんだ
はやく用事をすませないと……

「あの……これ。お婆様からです」

「ああ。まつたく、金はここって言つたんだがな……」

あの袋の中せびりせびりせひじ

以前、壊れた家の修理にダイクさんが無償で手伝ってくれたのだった
多分、そのお礼であつ

(せうだ・・・帰らないと)

そつと、その場を去るのとした時

「あ、嬢ちゃん。今田ロイドが帰つてくるらしきんだ。どうだい、
あいつの顔見てつてくれないか?あいつも喜ぶと思つんだがな」

その瞬間、頭が真っ白になつた。

ロイドが……帰つてくる……

ダツ！！

氣づくと私は走り出していた

もう周りなんて見えない。ただ、その場から逃げ出した

その場で待っていたら、合つてしまつ

幸せな彼らに・・・

長い間走り続けた気がする

走り疲れ一息つくと、見慣れない場所に立っていた

綺麗な緑の草原が広がる場所に、策に囲まれた屋敷が一つ建っていた

レンガで造られた少し年季の入った屋敷で、大きさもさほどでもないが、とても立派であった

(こんな場所があつたんだ……)

そつと屋敷に近づくと、子供の笑い声が聞こえてきた

屋敷の敷地内で、数人の子供とその真ん中にシスターの格好をした女性がいた

はたから見ていると、とても楽しそうな光景だつた

「これは何かの施設なのであるうか……そんなことを考えていると、一人の少年が私に気がついた

「おね～ちゃん、だ～れ？」

すると、シスターが焦つた顔でこちらに来たのだ

「あ、あのーすいませんー勝手にこの屋敷を使つてしまつて

どうやら私がこの屋敷の関係者か何かと勘違いしている

「あ、いえ。私はこの屋敷とは関係ないんで……」

「そ、そつですか……はあ～よかったです」

胸を撫で下ろすと、改めて私の顔を見てきた

「あの～どちら様でしょつか？」

「えっと、イセリアに住んでる者なんですが。えへへ・・・道に迷ってしまいました」

シスターはクスッと笑うと、

「どうですか。イセリアは、この川沿いを歩いていけば大丈夫です
よ」

「どうなんですか。ありがとうございます」

いえいえと、笑顔で答えるシスター。何故だかこの女性がまぶしく
見えた

そういえば、ここにシスターは何をしているんだろう。聞いてみることにした

「あの、一つ聞いていいですか？」

「はい。何でしょ?」

「ここに何をやっているんですか?」

「・・・わたしはここで孤児院をやっています。この子達は、ディ¹
ザイアンに家族を奪われたんです。そんな子供達を集めて、私が親
代わりになっているんですよ」

「そりだんたんですか・・・」

グイグイ

誰かが私の服を引っ張つている

下を見ると、そこには熊の人形を持つている茶色い長い髪の少女がいた

「おねーちゃん。あそぼー」

シスターは、スッと私の服から手を離せさせ、「ダメよ。お姉さんに迷惑でしょ」

「あ、いいですよ。今日は暇でしたし。」

「やつですか……。でわ、すいません。子供達の相手をお願いします」

申し訳なさそうに深々と頭を下げた

それから私は子供達と遊んだ

鬼「じつじまめ」と、かくれんぼにだるませんが転んだ

この数ヶ月間の中で一番充実した一日だと思った

走つて疲れて笑つて。子供達の笑顔を見てくるつぱり、こつものあ

れこれ考えている自分が消えていた

カーカーカー

カラスの鳴き声がきこえると同時に、日が暮れていることに気がついた

さすがに夜道はいろいろと危険なので、そろそろおことましよう

「今日はありがとうございました」

頭を下げるシスターに、

「いえいえ、こちらこそ。とても楽しかつたです」

「子供達もあんなに喜んでいて。久しぶりですよ、あんなに輝いた笑顔を見たのは。あなたには子供をひきつける何かがあるのかもしれませんね」

お世辞でもうれしい。照れ隠しに、えへへと笑つた

そのときだつた。私の後ろに田をやつたシスターの顔が急にこわばつた

「どうしたんですか、シスター？」

「・・・コレットさん。子供達を屋敷に入れてください」

ひめひめひめ

大勢の足音が聞こえてきた

振り向くとそこには、縁のボロボロのマントを着ている男達がこちらに来た

そのマントには黒い骸骨が描かれていた

「……」いらに住んでいる山賊『ブラックスカル』っていうグループです。旅人を襲い、金目の物を奪い、殺す。……今まで見つからないように頑張ってきたんですが。」

「……もしかして、私の後をついてきたんでしょうか

「コレットさんのせいではないわ。お願ひ、子供たちをお願いします」

シスター一人で山賊がどうにかなるわけが無い。私は護身用に持っていたチャクラムを取り出した

恐いという感情は無かつた。今まで幾多ものモンスターやティザイアンと戦ってきた自分にとって、山賊なんてかわいいもんだ

自分でまいた種だ……自分で後始末をつけないと……

「私が・・・・・戦います。シスターは子供達と逃げてください」

それだけを言つと、駆け出した。

後ろでシスターの声が聞こえたが、それを振り切つて山賊に向かつていつた

「なんだ嬢ちゃん? おれたちや後ろの屋敷に用があるんだけどよ・・・」

軽い感じの男を中心、がたいのいい男達がざつと二十人

一人では、ましてや今まで援護中心に戦つてきた自分にとつては厳しい・・・・でも、やらなければ

「あそこに行きたいのなら私を倒してから行つてください」

山賊たちは笑いながら私を馬鹿にした

中心にいる男が指示し、一人前に出した

「なめた奴だな・・・。ペケジ! あのガキを殺せ!-!」

大柄の山賊は、大きな斧を振りかざし私の頭の上から振り下ろした

ズドン！－！

斧が振り下ろされ、土煙が上がった

「おいおい、ちつとは手加減してや・・・・・つ！－！」

山賊は驚いた。土煙が消えた後には、少女の死体ではなく仲間の身体が地面に倒れているのである

その横で、金髪の少女は両手に金色の輪を持ち、こちらを振り向く

「・・・怪我をしたくないのなら引いてください！次は手加減しません」

「！」このくそガキがあ－－－！－！－！－！－！－！－！－！－！

一斉に剣を構えた山賊たちは、コレットに向かつてきた

天使術は強力すぎるから使えない。だから使える技は、チャクラム

の技のみ

かなりあつこが、今日と雪ひ田をくれたシスター や子供達のために
戦う

たとえ勝算が無くても・・・

第一話

キンッ キンッ キンッ

金属がぶつかり合つ音が響きわたる

一人一人三人四人・・・・・・

いつたい何人の山賊を倒したか

長い間戦つていなかつた身体での戦いで、疲労もたまり、体中が悲鳴をあげていた

息遣いも荒くなり、もう敵の攻撃を防ぐので精一杯なのだ

だが、引き下がるわけにはいかない

ここにやられたら、皆が危ない

「へへつ、もう限界っぽいな。お前ら一やつちまえーー！」

山賊たちは私を囲むよつとするべ、じりじりと近づいてきた

（…………）

胸の前で十字をきり、天使術の呪文を唱えた

「その御名の元、この穢れた魂に裁きのひかつ！」

ガクンと膝から崩れ、地面に手をついた

もつ呪文使えるほど体力も残っていなかつたのだ

（もう、ダメ…………）

そう思つたときだつた。

『そここの金髪、伏せろー。』

と、何処からともなく声が聞こえてきた。すかさず地に伏せると、ブンッという音と共に、大きな円形の閃光が走るのが見えた

そつと顔を上げると、私を取り囲んでいた山賊たちが倒れていた

そして、私の前に見知らぬ男が立つていたのだ

真っ黒いトレーナーに黒いダボダボのズボン。靴はとても頑丈
そうな皮製の靴に、ズボンにジャラジャラ長いチェーンをつけてい

る。銀髪の短髪のウニ頭。

おまけに自分より大きな鎌のよつた武器を持っていた

盗賊の仲間ではないようだが・・・・・

その時後ろからもう一つ、誰かの声が聞こえた

「コレットさん！大丈夫ですか！？」

シスターだった

私の傍によると、救急箱を取り出し、私の傷の手当をしてくれた

「シスター・・・・危ないですよ・・・」

シスターはニッコリと笑うと、

「大丈夫ですよ。

「彼」が来てくれました。」

彼？　彼とはもしかして、この黒服の人のことだろうか・・・・・

黒服の人は、山賊の最後の一人と対峙していた

「て、てめーはなんなんだ！？急にあらわれやがって！！」

震える手でナイフを持ち直し、切りかかってくる山賊に大鎌を振り上げ、斜めに振り下ろす

振り下ろした衝撃波が紫の閃光となり、山賊に直撃した

と、謎の奇声と共に吹き飛び、見えなくなつてしまつた

倒れていた盜賊も、それを見て逃げるよう走り去つていった

ふう、とため息をつき、大鎌の柄の部分を引っ張ると、大きな刃の部分が ガチン とはずれ、地面に落ちた

「つたく、また変えないと……」

そうぼやきながら、じりじりと近づき、私の横にいるシスターの前まで
来た

「大丈夫かシスター、と、・・・誰だ、こいつ？」

「「Jの方は「レシトさんですよ、アスラさん。」レシトさん、ありがとうJ様です。こんなにボロボロになつてまで……ホントにすいません……」

アスラと呼ばれた男は、ギロツとこちらを睨むと

「えっと・・・今までこうして貰ってありがとうございました」

意外な発言に驚き、田を丸くしている自分にきづいた。慌てて笑い顔をつくつて

「いえいえ。その、助けてくれてありがとうございました」

ペコリとお辞儀をする

照れくわわうに、頭をかきながら

「あ、おひ」と叫んだ仕草が、何故だか『彼』を思わせた

シスターの傷の手当が終わり、再度自分の怪我した部分を見てみた

幸い浅い傷が多くあるくらいだった。さつき戦えなくなつたのは、単なる体力不足だったらしい

「そういえば・・・」

シスターが何かを思い出したか、口を開いた

「コレシアさん、お家に帰るのは大丈夫ですか?」

・・・・・忘れていた

空を見るが、夜空が広がり、とつてて門限が過ぎてこないでいることを
する

「少しめでこですね。それじゃ、傷の手当ありますか」とつりやれこました
！」

「いえいえ、うちらの今口は本当にありますから」やれこま
した。夜道お気をつけて

立ち上がりとしたとき、右足に激痛が走った

またその場にバタンと座ってしまった。ビックり足が響いてしまつ
たよつた。ホントなわけない・・・

「えへへ。足響ひやひつたみたいですね」

「まあ、どうしましょ。・・・・・やつですわ。アスラアラゴン

トさんを家まで送つてくださいなー。」

俺?つと自分を描かし、ふうとため息をつくと、アスラは私の前に
しゃがみこんで、背中を向けた

「わかったよ。おこ金髪、まひがふわれ」

「い、いいですよ。少しすれば直ると思いますし」

「時間、やっぱいんじやないの？それとも、嫌か？」

「い、いえっ、そんなことはないです。．．．あの、それじゃスマセン、お世話になります」

肩に手を回し、アスラの背中に体重をかけた

「あの、私重くないですか？」

「いや、ぜんぜん重くないぞ。ってか、お前痩せすぎじゃないか？」

「駄目ですよアスラさん」

はにかむコレットを見て、シスターはアスラに肩をすくめて見せた
「女性に体重のこと聞くなんて失礼ですよ」

「やうなのが、金髪？」

「えへへ、そんなこと無いとも言い切れないよ」
「ううん…。乙女心はわづかんね～な

自分で何を言つて居るのか分からなかつた

アスラは困つたように頭をかしげ、

「ううん…。乙女心はわづかんね～な

ふふっと笑うシスターに、私も照れ隠しで笑う

・・・・・ こんな光景、前にあつた気がする

『ロイド、私重くない?』

『ぜんぜんー前よりずっと軽いぜ。お前、痩せたんじやないか?』

『駄目だな、ロイドは。女性に体重のこと聞くなんて失礼だよ。最悪だね』

『そうなのか、先生?』

『ええ、そうね。禁句と言つてもいいわ』

『・・・馬鹿を言つてないで、行くぞ』

・・・ずっと昔の想い出だ

懐かしくもあり、胸を締め付ける感じもある

でも、今この感情を表に出したらまたシスターに心配をかけてしまつ

とじあたおじり、心の中…・・・

暗い森の中をじばり歩き続けた

アスラは特に蝶のことも無く、無言のまま歩き続けた

静かな時間の中に、アスラのズボンについているチャーンの チャ
リン チヤリン と言づ音だけが、響いていた。その音を聞いて
いぬつひじ、急に眠気が襲つてきた

コクン コクン

視界が歪み、意識が遠のいてゆく

(あ、寝ちゃう…・・・・・・・)

『アスラ視点』

少女を背負いながらしばらく森を歩っていたとき

くー くー

背中から寝息が聞こえた。足を止め、喋りかけた

「・・・・寝たのか？」

問い合わせに答えない。どうやら寝てしまつたらしい

「つたぐ。少しば警戒しろよ」

こいつは多分、馬鹿がつくほど人がいいんだろう。他人のために山賊に立ち向かうなんて・・・

ホント・・・よくやるもんだよ

(・・・サンキューな)

そつ心の中で苦笑い、歩を圧した

『次の日』

チュン チュン チュン

鳥の鳴き声が聴こえ、カーテンの隙間から光がさす

寝返りをすると、布団の隙間から涼しい風が入つてくる

目を開けると、見慣れた自分の机が見えた

それで気がついた

どうやら私は自分の部屋で寝ていたようだ

「彼」、アスラが私を送り届けてくれたのだろう

（後でお礼を言つておかないと……）

そんな事を考えながら着替えをし、一階に下りていった
今日の服は昔の神子装束。何故か今はこの服を見ても何もかんじなかつた

つめたい階段をひたひたと下りていぐ。下に行くにつれ、パンの焼
いた匂いとお父様の話声が聞こえる

お客さんでも来ているのであらうか。サッと髪を整え、リビングに行こうとした時、懐かしい声が聞こえた

・・・ロイド・・・

私はその場から動けず、そのまま立ち止まつていた

ロイドは数分話をすると帰つて行つた

それを見て、安心した自分がとても嫌だつた

それから少し時間を空けて、一階に下りていった

食事をとしながらお父様やお婆様との会話を、ほとんど帰ってきたロイドの話であった

それと、驚いた話だが、昨日家に運んできてくれたのはロイドだったそうだ

びつこひじだひつ・・・

「コレシト。今日はロイドに会って行つたらいだへ、昨日の会話をなつたんだし。お礼を言つのも含めて、せめて顔くらいに出したらどうだ。・・・・お前の気持ちもわかるが、こつまでもやうしてはいられんだらう。」

私はスッと立ち上がり、食器を口付けると玄関に向かった

そしてお父様の方を見て言つた

「お父様にはわかんないよ・・・・絶対・・・・

それだけを言つと家を出た

お父様は私を止めることも無く、ただ私の背中を見ているだけだった

・・・私はいつからこんな嫌な子になつたんだろ？
自分の親の言つことも聞かず、お世話をなつた相手にお礼も言つて
いかないなんて

最悪だよね・・・ホント・・・・・・

自分を責め、下を向きながら歩いてくると・・・・

ドンッ！

「キヤツー」 「うおおと」

誰かにぶつかってしまった

ぼと ぼと ぼと

ぶつかつた相手の手に持つていた紙の袋から、ジャガイモが転がり
落ちた

「す、すいません！ 今拾います

（何やつているんだろう？ 私。また人に迷惑かけて・・・）

「あれ？お前・・・金髪か？」

聞き覚えのある声が聞こえた

顔を上げると、そこには黒いトレンチコートが特徴的なアスラさんが立っていた

手には溢れんばかりの荷物を抱えている

「あ、アスラさんー何しているんですか！？」

「見りゃわかるだろ、買出した。シスターに頼まれてな。てか、ジヤガイモ。ほら、拾つてくれ」

「あ、はい！」

急いで拾い上げ、抱えている袋に入れた

「すいませんでした。下を向いて歩いていたんで

「いや、別にいいんだけど。てか、お前今日暇か？」

「え、はい。暇ですけど・・・」

「そんじゃ頼みがあんだけじよ。またガキどもの相手してくれんねーか？あ、ちゃんとバイト代は出すぞ」

「バイト代なんていらないですよ。私でよければ遊び相手になります」

助け舟だった。あんな事を言つてしまつたので、家に帰る」とも出来ず、行くところも無い。「こんな中で、また昨日のよつな一日が過ぎる場所に行ける

「つむりがお金を出したいくらいだつた

「まあ金の事はおこといて。んじや、今日も頼むな。」

ポンッと私の頭をはたく

私は今出来る最高の笑顔で

「はいーよろしくお願ひします。あの、その荷物持ちましょうか?」

「ん? んじや、これ持つてくれ。」

ダンと手渡されたのはさつきのジャガイモが入つた紙袋であつた

少し重いが、持てない程ではない

持ちやすいように持ち直し、アスラに話しかけよつとした時には、
スタッフと歩き出していた

おこていかれないよつて、隣に並び、歩き続けた

『コレットの家にて』

深いため息が、家中から聞こえる

コレットの父だった

テーブルに座り、遠い田をしながらコレットの笑顔を思い出していた

その隣に座つてこるおばあちゃんに話しかけた

「・・・私は父親失格だろうか。あの子をまた傷つけてしまった・・
・」

「自分の子を心配する親父が、父親失格なんて事はない。大丈夫じ
やよ。あの子ならまた心から笑ってくれる」

その言葉をじう思つたのか、コレットの父は立ち上がり、二階・コ
レットの部屋に向かつた

静かにドアを開けると、綺麗に整頓された清潔的な部屋だった

周りを見渡していくと、一つの『真たてが』にとまつた

その写真たては倒されていて、ホコリもかぶつている

ホコリをはらい、持ち上げて写真を見てみた

そこに写っていたのは

赤い服を着た少年と自分の娘が肩を並べ、笑っている写真

真であった

「・・・・・コレット。お前はまた笑ってくれるか?」

自分以外誰もいない部屋で、一人そう呟いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3548d/>

テイルズオブシンフォニア・自分の笑顔を誰かのために
2010年10月9日12時36分発行